

鎌倉市中央図書館

近代史資料室だより

第 8 号

鎌倉市中央図書館
近代史資料担当
鎌倉市御成町 20-35
電話 0467 (25) 2611

≪研究ノート≫⑥

材木座公会堂の保存について

梅澤典雄設計事務所 梅澤典雄（材木座）

はじめに

材木座公会堂は、大正七年（一九一八）に竣工して以来、百四歳の長寿を迎えています。この歴史を経た建物が、令和二年（二〇二〇）八月、国の「登録有形文化財」に認定されました。（第140284号）文化庁から「一般社団法人材木座自治連合会」に対してプレートが送られ、現在立派な説明板に埋め込まれ、通る人々の目を引いています。補助を受けながら、元の構造と部材を生かして耐震補強工事と修復作業が行われています。



私の祖父と祖母が乱橋材木座に新居を構えたのは大正五年（一九一六）である。数年前、イベントで訪れた公会堂の壁に掛けられた寄付者名に祖父の名前を見つけた。そこには大正七年八月という日付が記入されていた。この建物が一世紀あまりここに建っていて建設時に祖父もその他大勢のひとりではあるが関わっていたことが分かった。

材木座公会堂の外観はサイディング（外壁材）で改修されていてとりわけ立派でもなくて単に古い建物という印象である。

玄関の段差も大きく、全くバリアフリーからは程遠い。トイレも狭く設備も悪い。柱も傾いていて危険だった。「汚いから壊して現代的な建物にしてはどうか。」という意見が多く上がっていた。

目次

- ◆研究ノート⑥「材木座公会堂の保存について」 1
- ◆古文書紹介「彩色柏尾川流域絵図」…………… 9
- ◆古写真御焚き上げ供養にて…………… 11
- ◆モノキュメント⑧「西田幾多郎歌碑」…………… 12
- ◆寄贈資料紹介…………… 13
- 小袋谷村「富士講一額 熊田葦城『日本史蹟大系』
- ◆会の活動紹介 「鎌倉アカデミアを伝える会」観蓮会
- 「CBCの会」「鎌倉別荘地時代研究会」…………… 14
- ◆インタビュー（むかし語り）⑧…………… 15
- 「江ノ電旧稲村ヶ崎駅前に住んで」豊島操子さん



正面（西側）外観



公会堂南側



玄関土間

東日本大震災以来材木座の住民は津波浸水区域として危機感を持っている。防災拠点を兼ね頑丈なビルとして公会堂を建て替えるべき

だという意見があった。材木座自治連合会ではそれらの意見を踏まえ平成二十九年（二〇一七）に公会堂建て替えプロジェクト検討委員会を設置し議論を重ねた。

津波浸水域の中にあるこの敷地に防災拠点をつくることは是非、予算上、都市計画上の制限から現状を超える大きさの建物は難しいなどの条件がわかってきた。いずれにしても現在の建物の価値をきちんと評価したうえで考えようという結論になった。

元第一中学校校長でその後郷土史の研究をされた小松原利一氏の研究を頼りに調査を行った。

この公会堂は材木座の町の歴史とともにあり、竣工5年で関東大震災に見舞われ、太平洋戦争、戦後の高度経済成長と時代の流れの中で途切れることなく住民に使いつながれてきた。住民に非常によく利用されていて令和二年時点でほとんどの使用予約が埋まっていた。

選挙の投票所はじめ、自治会の会議、老人のいきいき体操、若い奥さんの赤ちゃん広場、そろばん塾、講演会、映画会、様々な団体のワークシヨップ、小学生の夏休み教室など利用は多岐にわたっていた。

結局この材木座公会堂こそ材木座のアイデンティティーであり町のシンボルであるという結論になった。

おりしも平成三十年（二〇一八）金沢工業大学工学部建築学科の後藤正美教授のもとで「鎌倉における伝統的木造建築物の耐震性評価に関する研究」でこの建物をサンプルとして研究した結果耐震補強し保存再生する可能性があることを指摘された。

材木座自治連合会の公会堂建て替えプロジェクト検討委員会として公会堂を建て替えるのではなく現建物をできるだけ保存しまちづくりの核として利用することこそ必要であるという結論になった。

その文化的価値を多くの人に知ってもらうことが保存再生に不可欠である。そこで鎌倉市文化財課のすすめもあり材木座自治連合会は登録有形文化財として登録を目指した。

1 建物概要

所在地 鎌倉市材木座4丁目356-1
敷地面積 295.73㎡（敷地の所有者は五所神社）

所有者 一般社団法人材木座自治連合会（平成二十九年登記それ以前は不詳）

構造・規模

木造二階建て寄棟造 金属屋根葺き

建築面積 90.15㎡

延べ床面積 118.17㎡

建設 大正七年（一九一八）八月町民による寄付金で建設された

消防水利 鉄筋コンクリート造地下防火水槽（現在は使われていない）建設当初は消防ポンプを格納したが現存しない。

施工者 地元の宮大工 金子善三、須藤隆治、古川清吉ほか
仕上げ概要

基礎 鎌倉石（地覆石）（増築部分一部コンクリート）

屋根 〈建設当初〉日本瓦葺き（土葺き）、
〈現在〉カラー鉄板小波板葺き、玄関破風屋根は日本瓦葺きのまま

外壁 〈建設当初〉土壁下地杉ササラ子下見、〈現在〉窯業系サイディング張り

内部仕上げ 壁・真壁造、土壁の上に漆喰塗、床・畳敷き、天井・杉竿縁天井

2 建物の特徴

一階の集会室は十畳間が東西に3室通し間になっている。襖を入れれば3室になるが現在襖は倉庫に仕舞っていて三十畳の広間として使っている。一番手前の十畳間は当初は畳敷きであったと思われるが現在は合板の上じゅうたんが敷かれている。一番奥には7尺5寸幅の床の間が設けられている。床板、床柱、落とし掛けは当初のまま。床の間の左は押入れになっている。押入れはこの時代の住宅でもよく見られる仕様で壁にネズミ除けのトタンが張っている。



座敷には戦前材木座に住んでいた南次郎陸軍大将と勝田主計文部大臣筆の額が掛けられている。

集会室の南側障子を隔てて3尺(909mm)幅の縁側となる。

もともとあった障子が経年劣化したため近所の邸宅の解体の際にその座敷に使っていた建具を譲り受け再利用したもので当初のものではない。座敷は真壁造で柱は4寸角、各部屋に長押(なげし)がついている。

壁の下地は小舞下地の土壁で土壁は桁、梁まで到達している。

玄関は四畳半の広さで、三和土は1坪半、敷台までの高さ410mm、座敷へはさらに上がり框で150mmレベル差がある。昔ながらの玄関である。

この玄関の左手の壁に古い寄付者名を記載



寄付者銘板

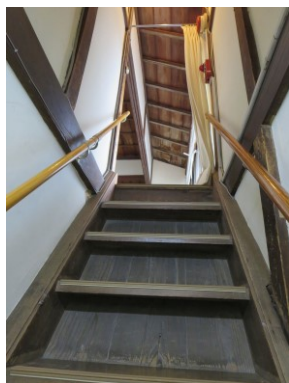
した額が飾られている。現在その銘板を覆うように別の掲示板が張られ半分以上は隠れている。

玄関の右となりが六畳の準備室となっていて湯沸かし室が隣接する。現在物入れで使っているところに通用口が設けられていた痕跡がある。しかしその鴨居の高さが現在の床からは非常に低いのでおそらく湯沸かし室全体が現在の床がなく玄関と同じレベルの土間であった可能性が高い。

玄関の寄付者芳名票が取り付けられている壁の裏側は現在トイレが設けられている。おそらく当初倉庫だったと思われる。

平成二年(一九九〇)、元の外壁を外し15cmほど北側に増築をして水洗便所を設置した。当初のトイレは建物の東端、縁側の突き当りにくみ取り方式の便所があったが現在は倉庫になっている。

集会室右のドアを開けて急な階段を二階へ上がると十畳の会議室になっている。そろばん塾や自治会の役員会のような少人数の会議によく利用されていた。



ここにも一階と同じ7尺5寸(2272mm)幅の床の間と押入れがある。

戦後ある時期までは管理人がいて宿直室として利用していたという記録がある。

自治会の記録によれば平成七年、雨漏りがひどく、玄関の破風屋根以外を瓦葺きからカラー波板鉄板に変更した。

平成十年(一九九八)、住民の希望でエアコンを設置した。

外部建具は平成十一年の改修で以前の杉の木製ガラス戸をアルミサッシに変更し、平成十二年(二〇〇〇)には外壁の下見板をサイディングに変更した。

このように自治会費をため、また市の補助金を頼りに少しずつ改修を行い公会堂として生きながらえてきた。

建物構造と内部造作、天井は補修以外で手を入れた痕跡はない。壁も表面に平成十年頃に住民の手で塗装されたが下地はそのままである。したがって意匠の変更はほとんどない。

玄関の破風は建設当初のものでしっかりしている。懸魚に江戸時代に材木座に組織された火



2階会議室

消しの組印で丸印と四角の組み合わせられたものが彫られている。丸印は芥子の実、四角は枳を表し、「消します」という洒落から来ている。材木座の町内会のシンボルマークとして引き継がれた、今も材木座自治連合会はこのマークを使っている。



玄関の妻に掲げた「材木座公会堂」の額も由来は不明だが、左から書いているので戦後に掛けたものと思われる。



昭和に入り消防自動車が入り込まれて手狭になったため消防団は九品寺の北側の敷地に移転したが、昭和四十年頃までは鉄製の火の見櫓が道路際に建っていたと記憶している。

建築物の意匠は極めて実質的で華美なところは一つもない。材料も特に贅沢なものは何もない。柱も杉、梁は松を使用している。軸組は柱が一間ごとに建てられ、いわゆる折置き組み（梁に対して両端に柱が設置される組方）になっている。

当時の鎌倉の近代和風住宅では使い勝手がよく開放的な京呂組（数本の梁を大きな桁で受け柱を無くす組方）が一般的であったが公会堂では耐震性、耐久性がある昔ながらの折置き組を採用している。

大工棟梁たちはおそらくこの公会堂がいざという時の防災拠点となり、安心して末永く使えるようにこの工法を採用したのでろう。町の象徴となる建物の工事を請け負い普通であれば自分達の技を披露し後世に残したくなるだろうと思うが、それをせずに「実」に徹した潔さが評価できる。

寄付者芳名票の標題になっている「唧筒」（そくとう）すなわち消防用ポンプはおそらく手動式で車輪がついて運搬できるものと思われるが詳しい記録はない。公会堂西側の道路に面して格納庫を設けて設置し、その地下は鉄筋コンクリート造の消防水槽とした。水槽は現在もそのままになっている。近接して手押しポンプ付きの井戸があるが本当の井水なのか消防水槽に直結したものか不明である。

水槽の上は現在駐車場として普段から利用されるほか五所神社の例大祭の山車の御仮所として置き場になる。山車は整備のためにお祭りの一月ほど前に車庫から引き出されここに置かれる。同じころから子どもたちのお囃子の練習も公会堂で行われお囃子が夕方になると町中に響く。材木座の夏の風物詩である。

昭和に入り消防自動車が入り込まれて手狭になったため消防団は九品寺の北側の敷地に移転したが、昭和四十年頃までは鉄製の火の見櫓が道路際に建っていたと記憶している。

3 大正七年八月まで

材木座は明治期以降、紅が谷と海岸沿いの芝原地区を中心に富裕層の別荘が建てられている。大正八年の同人会作成の地図では九品寺周辺を中心に現在のバス通り沿いに光明寺まで、能蔵寺通りから紅が谷にかけて、宅地が広がっている。芝原地区には住宅が点在しているのがわかる。それは大正十二年関東大震災の直後に撮影された海軍航空隊の震災状況の記録写真の状況でも同様な宅地の広がりを確認できる。

明治四十五年（一九一〇）材木座地区の人口は約 2000 人、大正十二年（一九二三）には 4000 人を上回るようになった。江戸から続く田舎の漁師町は近代的な街へ変貌していく。こうした町への発展を見据えて防災拠点と集会場をつくる必要性が強く意識されたのであろう。町会議員、区長、青年団役員、消防団役員ら 8 名が発起人となり、字役員 34 名が賛成者となり町を挙げて寄付を募り建設に取り組みことになった。

玄関に残された講堂・唧筒寄付者芳名票によれば高額寄付者は三井高修（タカナガ）氏の 300 円、堀越角次郎氏 200 円、森村氏 150 円と当時材木座に 30 戸に及ぶ別荘を構えていた富裕層の著名人が並ぶ。そのほかゲーイ氏、モリソン氏などの外国人も名を連ねる。

わが祖父は隣近所の人たちと足並みを揃え

て5円、一番少額が50銭、総勢333名が寄付に参加した。

『鎌倉議会議史』によれば材木座の世帯数は明治四十五年390戸、大正十二年607戸となっている。変化を線形にとらえるなら大正七年は500戸程度になる。少なくとも6割以上の世帯が将来の街のために分相応に寄付をしたことになる。

発起人と字役員は寄付を集めに別荘、町民を一軒ずつ訪ね奔走したに違いない。そこに総額5448円50銭の重みが伝わってくる。

これが現在どのくらいの価値になるのか。小松原利一氏は当時の立派な家が20000円で建つといわれていたと証言している。また大正九年の大工日当は2円90銭(週刊朝日値段史年表)とある。現在約22万1000円なので1円(大正)≡7240円(現代)となる。一方企業物価指数(日銀)によれば大正十年が1.296に対して平成二十九年が687.8、物価指数であれば1円(大正)≡530.7円(現代)となる。幅がありすぎてよくわからないが建設費に関しては1円(大正)≡5000円(現代)と仮定すれば5448円50銭は2700万円程度となる。贅沢しなければ「講堂」・「唧筒」を完成できる資金と考えてよいだろう。

五所神社が明治以降この地域の氏神様として存在している。五所神社が土地を提供する形

で大正七年(一九一八)八月、講堂と町の防災拠点「材木座公会堂」が落成した。おそらく町を挙げて盛大に落成式を行い寄付者の銘板を入口の壁に取り付け記念としたのだろう。

祖父もいつか孫が自分の名前を見つけないかと期待したかも知れない。

4 関東大震災・太平洋戦争

竣工から5年公会堂の使命を果たす時が訪れる。大正十二年九月一日関東大震災は材木座にも甚大な被害をもたらしている。津波は豆腐川周辺と芝原地区(材木座5丁目)を襲い多くの被害があった。しかし津波は九品寺までしか到達せず公会堂は無事だった。多くの木造建築に被害があったが公会堂は大きな損傷はなくその後の救護活動の中心として活躍した。その当初の目的を見事に果たしたわけである。

太平洋戦争中警防団の結成や、国防婦人会の会合や、防空訓練の拠点としてつかわれた。暗い記憶として公会堂の歴史に刻まれた。

5 戦後から現代

戦後は民主主義をささえる公職選挙の投票所に使われるようになった。やがて自治会や社会福祉協議会が整備されこうした自治組織の拠点となった。

材木座には現在11の自治会がある。11の自治会が参加して材木座自治連合会が組織されている。建設当初から村社の五所神社の宮役

員が公会堂の管理を行ってきたが昭和四十一年十二月から材木座自治連合会が担当することになった。貸し出しのシステムも整うことでますます住民に利用されるようになった。

平成に入るころから利用者からの希望でトイレの改修、アルミサッシの変更、エアコンの設置、屋根の改修、外壁の改修と少しずつ改修が進められた。

とくに最近市内には畳式の公会堂は少なくなつた。材木座公会堂の畳は案外評判がよく赤ちゃんも転んでもケガしないし、何人でも車座で詰め込めるので若者のワークショップにも好評だった。

結果稼働率の高い公会堂として住民に愛されてきた。

6 登録有形文化財の登録申請

材木座には多くの戦前の住宅、商店が残っている。どれも文化財として見られることもなく、京都のように伝統的な街並みとして意識されることもない。ともかく古い家として特に意識することなく使われ続けている。しかしよく見れば古き良き伝統をもった文化財である。

材木座公会堂を保存して活用したいという材木座自治連合会の目論見の先にはこうしたまだ発見されていない埋もれた町の景観資源を生かして地域を再生したいという望みが入っている。

商店街と住宅地そして海が一つになって戦前から住み継がれ残っている場所は、鎌倉市内でも限られる。そうした雰囲気を生かした街づくりの核にしたいという思いが材木座公会堂を登録有形文化財にする意味があった。

鎌倉では関東大震災以前の木造建築物は極めて少ない。大正時代に町民の寄付でできていること、住民が協力して使い続けていること、内部は当時のままであることなど評価ができるということ、鎌倉市文化財課からも支援を得ることができた。

平成三十年(二〇一八)材木座自治連合会が中心になって登録有形文化財への登録申請を目指すことになった。

ここで問題が発覚した。材木座公会堂は登記されておらず所有者がはっきりしないことだった。管理は当初は五所神社の宮役員、昭和四十一年からは材木座自治連合会が担当しているが所有は町民の寄付で作った公共物のような意識から明確な所有者はいなかった。

文化財に登録するにも今後改修工事するにも所有者と建物登記が不可欠だった。

材木座自治連合会を正式に所有者にすることが決まったが、所有者になるためにはまず法人格を取得する必要がある。そのため平成三十年材木座自治連合会を一般社団法人として法人登録することを住民に諮り、正式に法人

格を取得した。一般社団法人登録は鎌倉市の自治組織としては初めての試みだった。

引き続き材木座自治連合会が所有者として材木座公会堂を建物登記した。

材木座自治連合会として文化庁に登録有形文化財の登録申請を提出し令和二年(二〇二〇)四月、登録が認められた。

7 将来に向けて

今後の問題は、これから先何十年公会堂として活用できるだけの耐震性や耐久性があるかどうかという点であった。大正期の建物なので鉄筋コンクリート製の基礎もなく筋交いもない。縁側は前面にテラス戸になっていて壁もない。さらに柱がかなり傾斜している。

筋交いや合板で補強し、壁を増設し、軸組にボルトや補強プレートを入れ、基礎を鉄筋コンクリートで作り直すなどの対策を施し、現在の建築基準法の規定に適合すれば使用可能になる。しかしその場合三十畳の続き間の繋がりや縁側の解放感が失われる。それは果たして文化財としてふさわしいのか。

当時の大工棟梁が技の限りに作りあげた建物に手を入れることで百年耐えてきたものをわずか数十年の寿命にする恐れはないのか。

専門家を交えて話し合った。

材木座公会堂のような伝統的な木構造は剛性が低い(変形量が大きい)が地震に倒壊しに

くいとされる。一方現代の木造は高い剛性と強度で地震に抵抗するようにしている。そこで一般的に用いられる許容応力度による構造計算では伝統的な木構造の適正な評価が難しい。限界耐力法による構造計算を行えばより構造的に合った評価が可能になる。しかし、限界耐力法とりわけ古民家保存が多い関西で確立されたJASCA関西方式といわれる方法を実践できる専門家は限られ、非常に手間がかかるため実行されるケースはまれである。

材木座公会堂の構造特性や空間を残しながら保存したいというのが材木座自治連合会の希望だった。

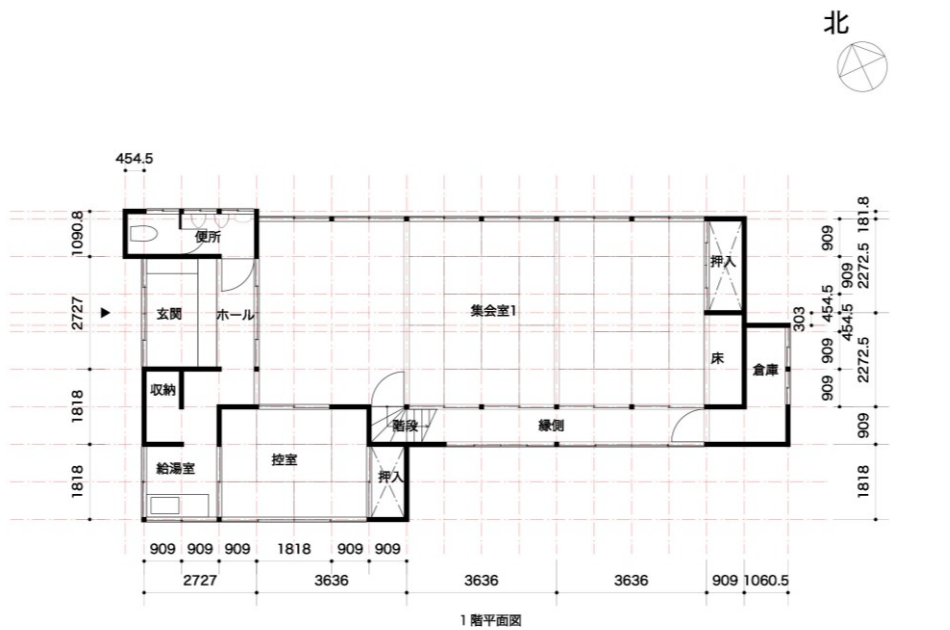
登録有形文化財を保存のために必要な耐震診断に対して文化庁からの補助金が出るということが分かった。さらに限界耐力計算ができる技術者が市内に数名いることが判明した。

そこで令和三年、こうした貴重な技術者の一人有限会社湘南建築工房(代表高野淳一)に、限界耐力法(JASCA関西方式)による耐震診断と耐震補強設計を委託した。

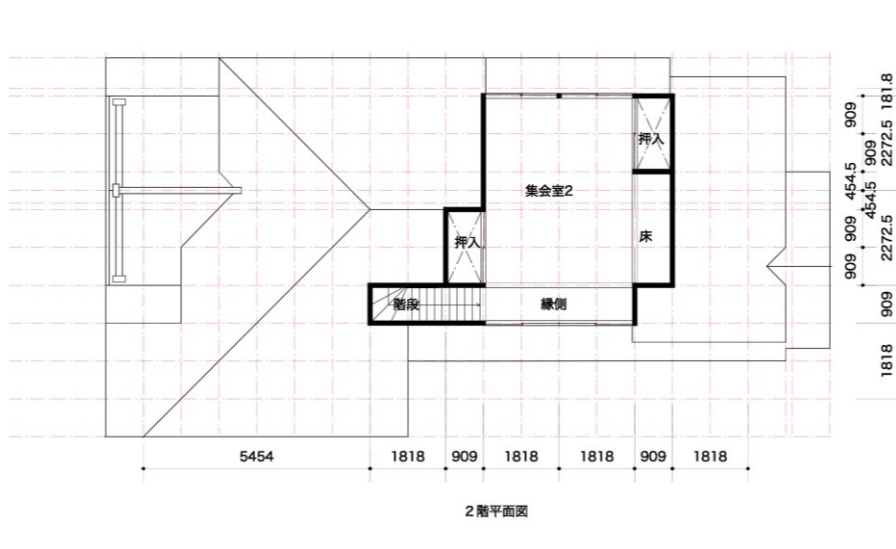
その結果、軸組と空間の大きな変更なしに建築基準法に適合する方法が提案された。

これに基づいて来年から耐震補強工事を実施する予定である。

この補強が完成すれば大きなイメージの変更にしに建物の安全性が担保される。さらに住



1階平面図



2階平面図

民からは設備や機能上に公会堂に対して多くの要望が寄せられている。材木座自治連合会では時代のニーズに合わせた改修を順次仕込んでいく予定という。

百年前にこの地に住んでいた人たちが私たちにこの材木座公会堂を残してくれた。また次百年の命を吹き込もうとしている。

先日自治会報で寄付の呼びかけが回ってきた。果たして現代の私たちは祖父たちが示した

町の心意気を示せるだろうか。

大正時代にこの地で暮らした人々から受けたタスキを次代につなげるか地域の力が試されているのだ。

参考文献 『材木座郷土誌』材木座自治連合会編 (冬花社)、『鎌倉議会史』鎌倉市議会

『日本銀行企業物価指数、明治・大正・昭和物価史』(週刊朝日)、『鎌倉別荘物語』島本千也

【付記】(近代史資料室記)

○歩んできた歴史と創立時に協力した人々

明治から大正時代にかけて湘南地方が保養地として人気が高まり、この材木座にも海辺や山合いに政府や実業界の要人たちの別荘が次々と建ち、その人たちの需要を賄うために商店も繁盛した。別荘と出入りの商店の付き合いには特別なものがあった。(*) 人口の増加に伴って町の姿も変わり、新しい公共施設が必要性が人々を動かし、別荘の人も巻き込み町全体の寄附協力によって、講堂(現公会堂)と消防ポンプの設置に至った。

公会堂玄関左側の壁に「講堂唧筒 寄附芳名標」と題して寄付者333名の名前と金額が7段に分けて杉板に墨書されている。今は黒ずんで読みづらいが、特別な存在感がある。全員の金額を合計すると5448円50銭になる。

この募金活動に奔走した地元の発起人と各字の役人の名前が末尾左下にある。発起人の8名は、町会議員小原計四郎・町会議員進藤善吉・区長高橋清兵衛・区長代理蔵並傳六・青年支部長霊山智空・青年副長小林権次郎・消防小頭古川直次郎・小頭代理蔵並龜吉である。地元の名前が主であるが、中には霊山(よしやま)氏のように材木座の「赤ひげ」と言われた医師の名前もある。次に賛成者 各字役員34名の名前が記されている。

金額の多寡ではないが、別荘の人の寄付額は多い。一部を転記するとこのようになる。

金三百円 三井高修殿 金貳百円 堀越角次郎殿
 金百五十円 森 村殿 金百円 堀井 元紀殿
 金百円 岡村武四郎殿 金百円 井口 誠二殿
 金百円 柳下助七殿 金百円 野口 栄二殿
 金百円 牧田清之助殿 金百円 鈴木三郎助殿
 金百円 黒田清光殿 金百円 水野袈裟六殿
 金百円 前山久吉殿 金百円 川田 龍吉殿
 金百円 金 森 殿 金百円 渡邊 渡 殿
 金百円 黒 田 殿 金百円 植村澄三郎殿
 金百円 尾崎三良殿 金百円 松方 正熊殿

このあと順次別荘の人と多数の町民の寄付が続き、中には鎌倉町内他地区の有力者や鎌倉町役場、鎌倉銀行、光明寺、鎌倉同人会など団体名もうかがえる。まさに地元を中心に町を上げての協力があつたと言える。

公会堂建設から5年後の九月一日の大震災にはこの建物は倒壊を免れ、復旧活動の拠点となった。ある震災手記(**)には、東京の会社で被災し交通手段が無く鎌倉まで二日ばかり徒歩で帰り着いた人が、自宅のある材木座の公会堂に辿り着き救護本部で家族の無事を聞いた瞬間のうれしさを綴っている。神に感謝を捧げて我家(現6丁目)へ向かったと書かれている。

戦前は戦時体制を支える地域の集会所の役

目を果たしていたと思われるが、戦後昭和三〇年代に入つて、地区ごとに自治会が組織され、材木座自治会連合や社会福祉協議会が結成された。公会堂はますます自治組織のセンターとして人の出入りも多くなる。昭和四十一年(一九六六)に公会堂の管理もそれまでの五所神社役員から自治会連合に移った。大正時代に材木座の大工たちがしつかりと建てた公会堂は、災害や戦争を耐えて材木座の文化財として生きている。近所の人の話では、床下の根太がとてもしつかりしていて、また地盤も飯嶋の山から海へ続く固い岩の上に建っているということである。平成時代に何度かの修理を重ねて今は快適な空間になっている。

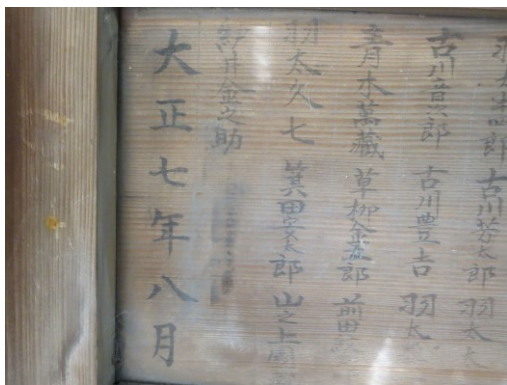
なお北に隣接する大町でも昭和十一年十一月に現在の外観洋風二階建ての「大町公会堂」が建てられ現在に至っている。

なお「材木座自治連合会」は、乱橋・若松町・神明町・宮仲・中央・紅ヶ谷・仲島町・諏訪町・芝原・上河原・東水会の11の自治会で組織されている。

(参考文献)

*遠藤光基「鎌倉材木座における商店の御用聞き
 の諸相及び特性」(神奈川大学『歴史民俗資料学
 研究』第27号 2022.3)

**麻生誠之「大正地震私記」『鎌倉震災手記』
 鎌倉市中央図書館(2017年)



「講堂唧筒 寄附芳名標」(下段左端)



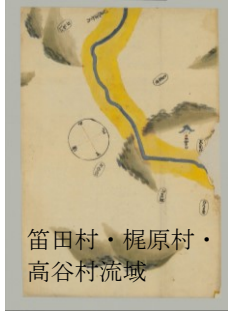
公会堂前で 戦時中の「鎌倉町警防団
 乱橋材木座」の勢揃い

古文書紹介(収蔵資料よ)②

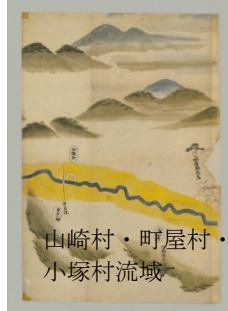
彩色柏尾川流域絵図



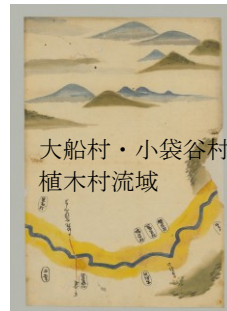
全図寸法 縦 60.0 cm
横 272.5 cm



笛田村・梶原村・高谷村流域



山崎村・町屋村・小塚村流域



大船村・小袋谷村・植木村流域

部分図寸法 縦 40.0 cm
横 27.5 cm

現在の柏尾川は横浜市の西郊を南北に貫流し、鎌倉市大船を経て藤沢市川名で境川と合流する2級河川である。今では護岸が整備され、流域は工場や住宅地として開発されているが、かつては水の恵みをもたらしながらも、流域に広い氾濫原を持つ暴れ川で周辺の村々を洪水などの災害で苦しめてきた。大水で田畑が壊滅する事も多く、文化年間には下流の片瀬川の流路が大きく東へ屈曲し、江之島への道が寸断されたこともあった。江戸時代の資料によると、洪水を防ぐために定例の川浚いや草刈りの作業が村々の負担として義務づけられていた。

絵図の表題について

この絵図の作成意図を理解する上で、表題らしきものを探すと、図中に書かれている「柏尾川并左右之寺社道法百間壱寸其外見取縮図」という記述がヒントになる。柏尾川の流路とともに周辺の寺社その他の事物の見取図を道法1/6000の縮尺で描いた縮図であると書かれている。

絵図概要

柏尾川は、現横浜市瀬谷区を流れる阿久和川と港南区平戸永谷川が合流する地点(現戸塚区)から始まる。絵図には、当時の阿久和川合流地点から激しく蛇行を繰り返しながら南下し、境川と合流し海へ出るまでの長い流路が青色で彩色されている。流域に沿って左右両岸に

黄色で太く彩色されている部分は、田畑である。川の氾濫原が田畑として利用されている。台風など大雨には被害を受けたはずであるが、田畑は遊水池の役目も果たした。

流域の全長について次のような記述がある。「相州鎌倉郡柏尾川阿久和川落合方同州同郡片瀬村海面吐口まで 元川長サ壱万三百壱間内長式百七間屈曲瀬違二成川丈ヶ減候分」。

これは、洪水などにより流れが変り、元の川の長さが207間ほど短縮されたということである。絵図中、小塚村と常盤村辺りに白く塗られた屈曲した川の跡のようなものが見える。

この図面で目を引くのは、流域に架かる橋が細かいタッチで描かれていることである。そしてそれぞれの橋から海までの距離が絵の脇に別記されている。

橋は、上流から、大橋(吉田町・矢部町)・高嶋橋(戸塚宿・上倉田村)・本郷橋(田谷村・飯島村)・戸部橋(小袋谷・岡本)・町谷橋(町谷村・小塚村)・川名橋(弥勒寺村・川名村)・片瀬川渡船場江ノ島道の7ヶ所である。そして、それぞれ海面までの距離が、大橋より長さ九三八四間、高嶋橋より八五五一間、塩壳橋(本郷橋カ)より六七一〇間、戸部橋より五三二二間、町谷橋より四二二二間、川名橋より二七七二間、片瀬川渡船場より一九五三間と記されている。瀬違いにより減じた川の総延長のなかで、あら

ためて橋から海までの距離を確認明記したのである。

描かれているのは流路だけではない。橋や周辺の村名と寺社森(天神山、五霊山、江の島等 16カ所)が描きこまれている。文化年間に完成した「東海道分間延絵図」を想像させるが、街道ではなく、柏尾川流路を中心に周辺を描いた絵図の下書きといえる。

絵図作成時期について

この絵図には、凡例として組合村名(○で囲う)・田畑耕地(黄色)・水(青色)・寺社森(緑色)・組合外村名(朱色三角)が明示されている。この方式から明治初期地租改正時期に作られた「地引絵図」との共通点がありそうだが、凡例の「組合村」をヒントに考えてみた。組合村といえば、文政十年(一八二七)関東一円に組織された「改革組合村」や、宿場の交通を支えた「助郷組合」もあるが、『藤沢市史年表』安政二年(一八五五)八月の項に「柏尾川組合惣代役人、高谷村・宮前村・小塚村・弥勒寺村・藤沢宿・鶴沼村等一四ヶ村名主へ柏尾川苧払・浚方出役御見分の通知あり」とあるように、柏尾川の掃除手入れの役負担を村々が組合を作っておこなっていたことがわかる。

本絵図には、次のような組合村名が記されている。(右岸上流から)上矢部村・矢部町・戸塚宿・今井村・田谷村・長尾台村・植木村・関

谷村・城廻村・岡本村・小塚村・宮前村・高谷村・弥勒寺村・鶴沼村(15カ村) (左岸上流から)下柏尾村・吉田町・上倉田村・下倉田村・長沼村・飯島村・笠間村・大船村・小袋谷村・台村・山崎村・町谷村・常盤村・梶原村・笛田村・川名村(16カ村)

柏尾川の苧払・浚方を指示し見分するという代官からの通達は幕末まで毎年のように出されている。毎年のように氾濫する柏尾川の保全活動は重要な仕事になっていたと思える。

また、絵図中に「片瀬川渡船場」が描かれている。白く塗られて、架橋される前のように思える。ここに橋が架かったのは、明治六年で、「山本橋」と呼ばれた。このことより明治六年以前に作成された絵図の可能性が考えられる。

なお、近代になって、初めて柏尾川に人為が加えられたのは、明治四十年(一九〇七)に始まり明治四十三年に終了した耕地整理事業だという。(松田磐余「水害の変遷と浸水危険地域地図」総合都市研究第35号 1988) 蛇行していた河道が直線化され、両岸に連続堤が建設され、現在の柏尾川の原型が作られた。しかしその後も周辺の開発と度重なる洪水のせめぎ合いが続いたことは周知の通りである。耕地整理組合も存在したと思うが、この絵図は村名の表記から見てもそこまで時代は下らない。

絵図作成年代が確定しないが、幕末の「柏尾

川組合」の存在と片瀬川渡船場を考え、幕末から明治初期までと思われる。

★資料受入れ状況

故木村彦三郎氏(元近代史資料室嘱託員)のもとで「郷土資料研究会」を作り活動をされていた堀春夫氏から受け取る。

研究会では鎌倉を中心に近世文書を収集し解説研究をしていた。成果は「会員文集」に収められている。会は「鎌倉災害年表」もまとめている。明治初期の地租改正資料も探訪し、藤沢方面にも足をのびしていたと聞く。20年以上前、堀氏が亡くなられる少し前に、平田に手渡された。ほとんど説明は無かった。封筒の表書きには「片瀬 山本家文書」とあった。一見して片瀬の大事な資料をいただいたと思ったが、保管したままであった。今回の資料整理にあたって、絵図に描かれている柏尾川は鎌倉の村を流れ、用水や災害の歴史と関係が深い。堀氏の遺志を尊重して、鎌倉市図書館で保管し、資料保存とデジタル化をして、広く利用に供したいと思う。

●なお絵図のデジタル版は鎌倉市図書館ホームページにて、近代史資料室↓デジタル資料↓絵図で検索できます。図を拡大してご覧ください。 近代史資料室 平田恵美

古写真御焚き上げ供養にて

令和三年（二〇二二）十一月十三日

秋晴れの一日、山ノ内「浄智寺」にて、写真の御焚き上げ供養が行われた。誰もが、思い出し詰まった大切な写真を、ただ捨てることには心が痛む。最初は二階堂の瑞泉寺で行われていたこの行事を今は浄智寺で引き継いでいる。浄智寺ご住職朝比奈恵温師の読経とともに、境内の仏殿の前でそれぞれが持ってきた写真が火にくべられた。アルバムなどから剥がして、ビニールなどが混じらないように準備して持ち込まれ、横浜など遠くからも参加されていた。「写真御供養感謝祭」という幟を立てボランティアの方が受付などを務めていた。



少し矛盾するようだが、図書館近代史資料室では、その場で「古写真収集にご協力を」とい

うチラシを配らせていただいた。ご住職の快いご承諾をいただき、ご参加の方々に、図書館の資料収集活動の一端をお知らせすることが出来た。感謝。



古写真収集にご協力を

明治・大正・昭和・平成期の写真鎌倉市中央図書館では昔の写真を集め、整理、保存、利用者へのご提供などを行っております。

写真は私たちに豊富な情報を運んでくれます。写真家の温かいまなざしを感じることもできます。

収集した写真をもとに写真展を開催するほか、鎌倉近代史資料集の刊行時には資料として掲載するなど後世に伝え、役立てたいと考えています。鎌倉の風物や生活の一コマを記録した写真がございましたら、ご連絡をお願いいたします。

鎌倉市中央図書館 近代史資料室

TEL 0467・25・2611

映画館があった鎌倉駅西口界隈 昭和 54 年	稲村ヶ崎辺りを走る江ノ電 昭和 45 年
今泉白山神社境内から参道を見る 昭和 41 年	極楽寺桜橋付近でにぎわう若者たち 昭和 52 年



モニュメント

⑧

西田幾多郎歌碑

哲学者西田幾多郎の終焉の地は、鎌倉稲村ガ崎姥ケ谷の自宅である。現在「西田幾多郎記念館 寸心荘」として学習院大学が管理している。

昭和二十年（一九四五）六月七日、西田の死は突然おとずれた。「戦争末期のこと、鎌倉の町にはすでにお棺も求められなかった。下馬の材木屋さんで板を買って作った」と孫の西田幾久彦氏は語っておられた。京都から駆け付けたお弟子さんにはそのつどお棺を開けて対面してもらったという。

その日から6年後、昭和二十六年（一九五二）七月十六日、七里ヶ浜を見渡す海辺の松林で「西田寸心博士歌碑除幕式」が行われた。この場所は、久米正雄氏、有島生馬氏らが砂浜を歩き回って探し当てた所だという。幾多郎の歌、団伊玖磨作曲の「七里濱夕日漂ふ波の上に伊豆の山々果し知らずも」が、鎌倉コール（前田幸市郎氏指揮）の合唱で歌われた。鈴木大拙、久米正雄、草間市長、安部能成、河合良成その他の参列を得、当時の鎌倉を象徴するような式典であった。建築家坂倉準三作のこの碑は、「こけしのようなだ、汽笛を表している、〃無〃を表す」など見る人によって違う表現がされる。その歌碑が最近の台風被害と砂浜の浸蝕で、移転

せざるを得なくなった。砂浜から国道歩道沿いへ、そして今回稲村ガ崎公園への移転となった。



昭和 26 年 11 月撮影（皆吉邦雄）



昭和 44 年 7 月撮影（鈴木正一郎）

稲村ガ崎公園に立つ歌碑 2022年春
クラウドファンディングで多くの方々の
ご協力をいただき再設置された。



【参考資料】

- ・『回想 戦争と鎌倉人』（出版委員会 1996年）
 - ・香取任平『花鳥亭日記』（近藤書店 1958年）
 - ・歌碑建立発起人名簿（中央図書館所蔵）
 - 【発起人】鈴木大拙・務台理作・和辻哲郎・谷川徹三・安部能成・久米正雄・大佛次郎・小島政二郎・川端康成・里見弴・長與善郎・天野貞祐・小泉信三・有島生馬・朝比奈宗源・高橋誠一郎・柳宗悦・河合良成・山内得立・須田國太郎・高坂正顕・西谷哲治・植田寿蔵・下村寅太郎・石井光雄・久松真一・岩波雄二郎・香取任平・安成三郎
- （賛助者225名 芳名省略）

寄贈資料紹介

小袋谷村富士講額



富士講額と生知(しょうち)氏 2021年11月27日

小袋谷公会堂に長らく収納されていた「富士山信仰」の記念碑といえる立派な額が図書館に寄贈された。古くて大きすぎて保管が難しくなり、捨てるわけにはいかないと、長年郷土史を研究されている生知義正氏が、運んで下さった。墨で描かれた雄大な富士山の麓に鳥居と松の林が描かれている。正面右上隅に△山真講社△と富士山講組織の紋章が書かれている。江戸時代から明治時代まで、各地で富士山信仰が盛んになり、地元の丘に塚を建てる動きがあった。大

船六国見の山頂には土を盛り「浅間大神」の大きな石碑が立っている。明治二十八年五月八日建設とある。世話人は大船村民がほとんどであるが、台村・小袋谷村・山ノ内村の代表者の名前もあり、共同で建設したようである。近村では寺分にある富士塚や駒形神社の石碑、町屋天満宮、梶原御霊神社の石碑も現存する。

小袋谷村の本額には「明治十七年九月吉祥日」とあるので、六国見の石碑建立より10年早い。裏面

寄附連名 平井吉五郎・立川新太郎・山ノ上喜右衛門・生知又右衛門・兵藤惣兵衛・田中重右衛門・齋藤七郎左衛門・全 平吉・細野徳蔵・田中八五郎・山ノ上長左衛門・兵藤二平・立川小兵衛・全 倉治郎・全 兼助・石井久太郎・高橋弥市・平井久右衛門・全 喜代松

發起世話人 栗田與四郎・本田與兵衛・兵藤政吉 明治十七年九月吉祥日

寸法 外枠 縦74.7cm 横104.6cm



山真講社(紋章)

富士信仰講社の一つ「山真講」(食行身縁・じぎぎょうみろくの系統)に属していた。

熊田葦城『日本史蹟』『日本史蹟大系』

—著者熊田葦城のご遺族(曾孫)から寄贈—

熊田葦城(宗次郎 1862-1945)は、広島県出身のジャーナリスト。明治・大正・昭和にかけて「報知新聞社」などを中心に旺盛に革新的な編集・執筆活動を繰り広げた。徳富蘇峰と同時代である。日本の史蹟を写真入りで連載し、のちに『日本史蹟』『日本史蹟大系』にまとめ出版した。鎌倉では明治時代の史蹟写真を

求める時、これらの本に掲載されている写真を参考にすることが多い。今回曾孫に当たる習田やよひ様から全冊の寄贈を受けた。関東大震災や東京大空襲にもご家族が守ってきた書籍である。さらに熊田が長年執筆した場所が鎌倉長谷の家であったとのこと。孫の正系氏(やよひ様の父上)は

子供の頃長谷寺が遊び場所であったと鎌倉との縁が深かったことをお知らせいただいた。

寄贈書籍数は『日蓮上人』ほか27冊である。



会の活動紹介

○鎌倉アカデミアを伝える会

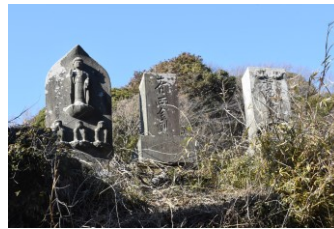
材木座光明寺を舞台に一九四六年五月に設立された鎌倉大学（のちに鎌倉アカデミア）を伝えて、二〇〇七年〜二〇一六年までゆかりの地光明寺で「伝える会」を開催してきたが、二〇一六年の「創立70周年記念の会」を最後に終止符を打った。連絡場所は鎌倉市中央図書館近代史資料室に残っており、問い合わせなどに応じている。昨年二〇二一年七月に、かつての世話人たちが光明寺で行われた「観蓮会」に参加して久しぶりに楽しいひとときを過ごした。



○CCPCの会（湘南鎌倉生涯現役の会分科会）

「鎌倉の今昔」「鎌倉 太平洋戦争の痕跡」「鎌倉 谷戸の記録」をテーマに近代史資料室ボランティアとして30年近く活動してきた当会は多くの先輩会員が他界する中で、少人数ながら、今も市内に残る「庚申塔」の再調査を行っ

ている。石塔の風化が進み字が読みづらくなっているが、これまで読まれていなかった造立者の名前も光線の具合など考えながら読んで記録している。地区によっては手厚く保存して新しい説明板を作っているところもあるが、放置されているケースが多く先行きが心配される。



○鎌倉別荘地時代研究会

創立第1回研究会は東日本大震災衝撃のさなか、二〇一一年四月十六日であった。以来100回の定例会を続けている。

会の目的

- ・明治・大正期の鎌倉の別荘地化を中心に地域史を研究する。
 - ・月例会において研究発表をおこなう(月1回)
 - ・鎌倉市中央図書館の別荘関係資料の整理に協力する。
 - ・湘南邸園文化祭へ協力する
- 代表 島本千也（地理・地域史研究者）

最近3年間の発表テーマ

2019	6・15	明治期地租改正図から見る鎌倉の村落空間 「巴里籠城日誌」を書いた渡正元と鎌倉の別荘について	岩田会津 平田恵美
	7・20	石碑・史実とのくいちがいあれこれ 江ノ電の鳥瞰図について	猪熊紀彦 大橋民男
	9・21	旧鎌倉加圧ポンプ場について 坂ノ下埋立地の図面を読み解く	奥山信治 武田光比古
	10・19	鎌倉市の温泉 海浜ホテル支配人 春田助太郎	進藤和子 平田恵美
	11・16	国宝館建築家 岡田信一郎 九鬼隆一と鎌倉	大沢匠 島本千也
2020	1・18	欧州航路船長平田四郎について	平田卓雄
	2・15	材木座公会堂と材木座の歩み	梅澤典雄
	10・17	笹目ヶ谷の別荘とファミリーヒストリー	中山尚彦
	11・21	材木座の別荘と商店(1) 建築家 武基雄と鎌倉のまちづくり	遠藤光基 奥山信治
2021	2・20	明治大正時代 米国ニューヨークに駐在した生糸貿易商 伊藤良吉(前編) 材木座の別荘と商店(2)	平田卓雄 遠藤光基
	4・17	「鎌倉プラン研究会」の頃	菅孝能
	5・15	明治大正時代 米国ニューヨークに駐在した生糸貿易商 伊藤良吉(後編)	平田卓雄
	6・19	古宇田實と鎌倉のまちづくり及び鎌倉文学館の建築について	奥山信治
	9・18	間島弟彦と鎌倉国宝館 鎌倉国宝館の細部意匠について	金子智哉 奥山信治
	10・16	光明寺本堂について(絵図を参照しながら) 長谷萬屋本店について	浪川幹夫 平井早帆
	11・20	腰越の別荘について(大澤三之助と鎌倉)	大沢匠

最近ではコロナ禍で、休会も多いが、20名近くの参加者で自由なテーマで会を続けている。参加ご希望の方は図書館近代史資料室までご連絡ください。

《インタビュー（むかし語り）》⑧

江ノ電旧稲村ヶ崎駅前に住んで

お話し：豊島操子さん

○昔の江ノ電稲村ヶ崎駅の名残り

この写真の左側の道は真つすぐ海へ向かっています。道沿い左側に「十一人塚」があり、右側には商店が並んでいます。この商店街の中の八百屋で私は育ちました。どうしてここにたくさんお店があったかという、かつてこの辺りに江ノ電稲村ヶ崎停留所があり、ここが駅前だったんです。



手前から、金田書店、豊嶋八百屋、魚市、すずらん薬局、一楽寿司、今子商店さらに海近くにいかり屋プロパンガスなどです。私は本を読むのが好きだったので、隣が本屋さんだったのはうれしかったです。風邪をひくと三ツ矢サイダーが飲めて、一楽

寿司のちらし寿司が食べられたのも懐かしい思い出。昭和三〇年代半ばです。

写真には写っていませんが手前の線路際に肉の稲村亭が今もあります。この辺りのお店で必要なものはひと通り揃いました。

○十一人塚の思い出

家の前には「十一人塚」がありました。塚は現在整備され保存されています。御存知の元弘三年（一三三三）五月十九日鎌倉攻めで戦死した新田義貞方の大館又次郎以下十一人の霊を弔うために建てられたお堂のあとだと言われています。昭和三十四年晩秋、極楽寺橋の近くから鎌倉時代の人の骨が千体も出てきて、山のように積まれていた様子を目にしました。小学五年の子ども心に思ったことは「昔の人って、歯が丈夫だったんだなあ！」ということでした。骨は大学の研究室などあちこちに運ばれ、十一人塚にも、リヤカー二台分運ばれ無縁仏として埋葬されました。丸い茶色の石みたいに見えた頭蓋骨を埋葬して2、3日してから母の夢枕に鎧兜を着た武将が現れ「水と線香だけでいいから供養してほしい」言われたそう。母はこれは十一人塚に埋葬された無縁仏に違いないと思い、それから50年間お花とお水をあげて毎日供養していました。どうぞ稲村の地で安らかに眠ってくださいという気持ちです。

○子どもの遊び

「川止め」（操子）

みつちゃん、けい子ちゃん、和枝ちゃん、歌子ちゃん それから、それから、なんとかちやん よく、川の流れ変えたね 砂で、山を作り 川の、流れに、負けないように チームワークよく 川止めを、成功させた 側に、流れていた川が、翌日、見ると右側流れに 楽しい、遊びの一つだった



「江ノ電のトンネル」（操子）

トンネルを坂ノ下側に抜ける冒険 男の子三人 女の子 私と幸枝ちゃん 江ノ電が 極楽寺のホームを 稲村ヶ崎側に離れた時 線路上の崖の 細い水道管を伝わり 線路に下り 5人そろったら ヨーイドン 走った 走った トンネルに入ると 暗くなる 枕木をとびこえ とびこえ とこどころにはだかの電球がぶらさがっている 避難所もそんなのどうでもいい 坂ノ下のごんごろうさんめざし ちいさかった出口が だんだん大きくなる 坂ノ下口に出た 権五郎神社に

ホツとした 帰りは 極楽寺からの 江ノ電
が 長谷に向かった時 来る時と 同じ要領
で 枕木を とび とび 極楽寺に 水道管
は登らず ホームから 置きっぱなしにして
ある ランドセルの元に

詩のように書いたけど、こんな危険な遊びは
今は絶対にしないでください。江ノ電がのろ
ろ走っていた頃の話です。

「磯」 (操子)

大潮、中潮、小潮 磯が引くと、皆で海へ た
ま取り、うにも、海牛ふんづぶし紫色、たこも、
小さな魚も、夢中になり過ぎると、もう、帰れ
ない、ずぶぬれになりながら、砂浜へ、重い、
重いと言いながら、家路に、母の、喜ぶ顔を思
いながら

○父母のこと

父 (豊嶋松雄) は七里ガ浜の人で左官屋。母
は藤沢本町育ちで賑やかな商店の娘。結婚の時
七里ガ浜へ挨拶に行つて、あまりにも山の中で、
家は三軒しかなくて驚いたと言っていました。
その頃、柴崎牧場がありました。

父は静かな人で、左官の仕事がない時は、近
くの切株のところまで本を読んでいました。池波
正太郎が好きだったようです。戦争中は軍の命
令で姥ヶ谷の下で海水から塩を作っていました
た。二人がかり泊まり込みで機械を動かしてい

たので、母は三食二人分弁当を運びました。み
ごとな塩だったそうですが、なめたことがあり
ません。

母は稲村ヶ崎停留所の横で八百屋をやつて
いました。世話好きで、気が良くて、「宵越
しの金は持たない」というタイプでした。稲村
ヶ崎のトーチカに続く洞窟の中に、今で言うホ
ームレス「トラさん」が住んでいました。戦時
中、稲村ヶ崎の山側に部隊が駐屯していたので
残っていた生活用品などを使っていたのか
も知れません。毎日、母のところへご飯を貰い
に来ていて、きれい好きだったけど、ある日ト
ラさんが三日も来ないので、交番のおまわりさ
んに「心配だから見てきておくれ」と。トラさ
んは一人静かに洞くつで亡くなっていたそう
です。金持ちの息子だったけど勘当されて乞食
になったと言っていたが、本当のことはわかり
ません。

○塩湯温泉のこと

「アリスの家」(*)の下辺りに、森永さん
が経営していた温泉がありました。海からパイ
プ(フィルター付)で海水を引き込んで沸かし
ていたようです。私たちはその温泉が大好きで
歩いて5〜6分なので家族でよく行きました。
お店が終わってから夜十時ごろに行ったりし
ました。時々カジメ(海藻)が入っていました。
肌がつるつるになった。真水は水道水を引いて

いた。建物は、入口に低い番台があり、手前が
男湯、奥が女湯で通路は實の子が敷いてありま
した。中二階に大広間があり、海水浴客や観光
客のための部屋だったかも知れませんが、その
内旅芸人が芝居をしていたのでその人達が泊
まっていたかも知れません。(**)

坂ノ下の埋め立て地の海寄りにも温泉があり
ましたが、規模は稲村の三分の一くらいでした。
(*)「音無橋」の手前にある聖路加看護大学管
理の建物。かつて新渡戸稲造の別荘であった。そ
の後有島生馬一家もしばらく住んでいた。

(**)昭和二十五年秋にはこの大広間で神奈川
県平和活動家大会が開かれ、小牧近江氏が大会宣
言。(木村彦三郎「頁なき風土記」塩湯温泉の頃)

【後記】

一年に一度だけの資料室だよりです。
今回は、建築士梅澤典雄氏から材木座公会堂の
保存について、詳しいご報告を頂きました。ま
た小袋谷町内会生知義正氏より御寄贈いた
いた貴重な「富士講額」(奉納額)や、移設さ
れたばかりの「西田幾多郎歌碑」の紹介をする
事が出来ました。昔語りでは、豊島操子氏の詩
と共にこども時代の稲村ガ崎浜通り商店街の
人間模様に触れることができました。ありがと
うございました。

「近代史資料室だより」第 8 号
発行 鎌倉市中央図書館

近代史資料担当

令和四年四月一日